

## B-6 山元町笠野地区

2012年7月29日(日)

---

報告者名	高倉 浩樹	被調査者生年	1956年(女)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	八重垣神社宮司(B-1・B-7・B-9話者)
補助調査者	小倉振一郎(東北大学農学研究科准教授)		

---

### はじめに

山元町中浜地区の神楽調査の比較の観点から同じ町中の八重垣神社のお天王さま祭りを、笠野地区担当の調査者と合同で調査した。中浜地区の神楽は2012年7月現在復興のための準備はすすんでいるが、まだ実施にいたってはいない。そのことから、隣接する地区での祭りの実施を観察することで中浜地区の状況を理解する比較の視座を得るための調査となった。祭り自体の観察記録は別に譲るが、大変賑やかな祭りの実施となった。特に興味深かったのは、八重垣神社の祭りは、基本的には笠野地区と新浜地区の住民たちのものであるということである。この調査に前後して、中浜地区の住民と話したときにも八重垣神社の祭りとは、基本的には関係ないという態度が見られた。また以下の聞き取り資料のなかでもこの祭りが2つの地区のいわば氏子地区概念と密接に関わっていることが示されている。なお、この調査は、笠野地区担当の稲澤調査員との合同調査でもある。

### 話者について

八重垣神社の女性宮司Aさんである。彼女は2011年度報告集のB-2での話者でもある。

### 祭りについて

震災以降、現在も海はもちろん浜に入ることも自体が禁止、立ち入り禁止になっている。地区からの浜に抜ける道路の浜側の入り口には今まで「立ち入り禁止」の杭がたっていた。今回の祭りで、御輿は海に入るだろうという噂が流れたが、その結果なのか、最近ブロックに変わっていた。

自分としては祭礼でこれまで行われてきた浜での神事は是非したいと考えている。その後は白張(白丁)をつけて練り、海に入るかどうかは担ぎ手次第なので自分としてはわからない。神様が(海に)行きたいと考えれば行くだらう。一応御輿のルートは警察に届けてある。しかし最終的には神様がきめることだ。

今年は御輿の担ぎ手にボランティアが含まれている。農協の青年クラブ(青少年よんいちクラブ)が調整している。来る者拒まずの精神でやっている。てらせん(山元町お寺災害ボランティアセンター)が人が足りなければ手伝うと言ってくれた。

先日(2012年6月24日)に植樹祭があったが、そのときの参加者に今日のお祭りについて御輿を担がないかと声をかけた。人が足りなくなるかなと思ったが、このように呼びかけるとあっという間にネットで広まった。

### 装束について

御輿の担ぎ手が着るための白装束は40着準備した。これは震災前もそうだったから。津波で流されたので文化庁からの予算で発注しそろえてもらった。何人くるかは最終的にわからないので足袋とズボンは60着ほど用意した。こっちは自前だった。近くの神社からも十数着借用した。

### 御輿の修理について

御輿についても流されたが、それが奇跡的に見つかった(新聞記事あり)。この御輿を修理して現在のものとした。

新しいのを購入するのではなく、古いのを修理して担ぎたいというのが担ぎ手たちの希望だった。神社の氏子総代が代表を務める保存会で修理を受け持った。御輿で壊れている飾りなどは残っている部分を参考にしながら作り直した。御輿の屋根の四方から伸びている木の曲がりの部分は「わらび」という。この部分は担ぎ木と御輿を結びつけるときに用いる部分である。強度も必要で、この部分の修理は大変難しかったという。「大工さんの苦労のしどころ」だった。震災後、大工さんが多忙だったため御輿を修理してくれる大工さんを見つけるのが大変だったようだ。

修理を担ったのは地元山下町の遠藤建築さんである。ここの人は細かい作業が得意である。息子と話をしたら自分たちでやってみようということになり、引き受けてくれた。主人である棟梁は70才、息子は40才ぐらいである（お天王さま祭りの神事に遠藤建設の棟梁の方は出席した）。

震災以前にも神社の長床の再現をしてもらったときがあった。このときにも遠藤建築に頼んだ。場所は山下駅の理容室（奥さんが経営）が自宅である。山元で宮大工の作業をしてくれるのはこの人くらい。

修理中に様子を見に行ったことがある。その時にはとにかく御輿の中から砂が出てくるということをやっていた。全部は取り切れないくらい、あとからあとからでてくるということだった。

### 宵祭りについて

前の晩におこなわれた宵祭りでは思ったより参列者がおおかったのがよかった。いつもは子どもが多いが、今回もそうだった。中学校の女の子は浴衣を気合いが入っていた。そうなるとこれにつられて男の子もくるのだという。今回中学生の参加者が多かったのが意外だった。親が車で送ってくれるので、かえって親の参加も多かった。

宵祭りではテキ屋さんのお店もでた。テキ屋さんから、その団体である宮城中央露天商組合から掃除代をもらっている。露天商が賑やかにあつまるのがお天王さま祭りである。以前、植木屋や自転車屋さんまで参加したことがある。自分の母の時代には、見世物小屋もでていたと聞いたことがある。正月とこの祭りのときだけは浴衣を買ってもらえた。

花火を打ち上げられたのもよかった。震災前は90本ぐらいあげたが、今回は55本（+スターマイン）ぐらいだった。「30万円+α」ぐらいかかった。お願いしたのは岩沼の佐藤煙火さんで、昔からのつきあいがある。

### 不安だったこと

お祭りを開催するにあたって不安だったのは、寄付がどのくらいあつまるかどうかということだった。今回は氏子区域の一般家庭からは集めていない。区域外の商店や企業をまわった。その際に、1軒からは「こんな時なのに」と怒られた。それ以外からは「がんばりなさい」と励まされた。寄付は思ったより集まり、被災前よりも増えた。というのも、企業の善意による献金であり、額が一定でないため、予想がつかなかったというのが原因である（仮社務所に会社名と金額が紙に書いて貼ってあり、花火の前には読み上げられました—稲澤調査員）。神社としても現在は収入に限られているのでお祭りの予算は絞ることにした。それが花火の本数の減少となった。岩沼に佐藤煙火さんというのがあり、そこに頼んであげてもらった。（稲澤調査員によれば）ちなみに、震災前は氏子である区民から花火代（祭典費）1,500円と神社への援助金（維持費1,500）円の計3,000円が集められていました。なお、自分はキリスト教だけど花火は見るから1,500円だけはらう、などという家もあったようである。今回は区費も集めていない状況なので、まして祭典費、維持費などは集められないとのこと。ただし、氏子さんの中には自主的に御輿といっしょにやってきた賽銭箱に入れる方などがいた。

### 宵祭りの準備

農協青年部の人たちがノボリをたててくれた。10メートル近くある高いもの。御輿をおく台もつくっていた（これは神輿の廻る順路上に、お神輿を「休ませる」場所のこと）。以前は演芸大会もやっていた。舞台を組む作業である。最近は人手不足で行政区の班長にたのんで班でお願いするようになった。



写真1 お天王さま祭りでの祝詞



写真2 修理された御輿

### 氏子意識

現在の時点では、震災後避難ということで他の場所に移った人であっても、「ここの氏子」という意識がある。祭りの実行に関しては、いろいろ伝えていかないといけない仕事がある。それを組織的にやっていく必要がある。その一方で氏子ばかりだけ頼ってはいられないとも考えている。神社独自の力をつけることが必要だ。(稲澤調査員によれば) 危険区域に指定されてしまったので、氏子区域の人がもとの場所に家を建てて住むことができず、神社の周囲に人が住むことはないというのが前提にある。また、移転先も集団移転ではないので、笠野、新浜といったまとまりがどうなるかもわからないというのも加わっているはずである。町としてはコンパクトシティ計画を推進しようとしているので、沿岸に電気ガス等が再びひかれることはないかもしれない(水道は、神社までは来ている。ただ、基本料金がかかるので、祭りのときは金を払い水道を使用していたが、普段は使っていない)。

### 伝承にむけて

JAの青年部も人数が少なくなり、先輩から後輩への伝承が難しくなってきたので、手順を記録しないとイケないと思っていたら、震災にあってしまった。氏子、JAがばらばらになってしまった。代が変わると引きつかれなくなってしまう。氏子になかり頼ってはいられないとも思う。また保存会をつくる話もある。

### 氏子地区と寄付集め

震災前、八重垣神社の氏子は300軒あった。氏子は個人ではなく世帯中心である。笠野地区と新浜地区である。氏子の考え方は、区域という考え方。神様が見ている範囲が氏子地区となる。だから新しくこの地区に入居者ができると、とりあえず説明に行く。氏子地区に他の宗教を信じる人がいても問題ない。お祭りなどで寄付をもらいに行くときには、行政区とは関係なく、神社として頼みに行く。氏子総会は笠野、新浜それぞれ別にやる。笠野地区からは区長・副区長とは別に4名が総代となり、新浜は2名だが、普通は区長と副区長が兼ねる。寄付をもらい回るときには、総代=役員がそれぞれ分担して行く。最初に手紙を出して、そのあとしばらくしてからもらいに行く。今回は営業している商店や会社を訪問した。瓦礫関係者の会社は仕事をもらっているからといって多く出してくれた。仮設住宅に寄付を集めにはいかなかった。結果としては寄付は氏子以外からが多かった。氏子の場合は自主性にまかせている。

### 信仰

震災後、自分の氏子についていえば、信仰心が強くなった気がする。改めてカミサマに頼ることが多くなったと



写真3 御輿の担ぎ手たち



写真4 仮設住宅地区内に掲示された祭の案内

思う。おもしろいのは氏子のなかでハマに住んでいた人とオカに住んでいた人で海に対する感覚が違うことだ。ハマとオカはこの地域の居住概念で、海岸部と、国道6号線をはさんでオカ側を指す。厳密な境界があるわけではない（注：報告者）。オカの人たちは津波被害にあっていないが、彼らは震災後、怖くて怖くて、海のほうに降りていけないという。このことを聞いたときにはびっくりした。自分たちハマ側はそんなこと感じていないのに、である。

八重垣神社はスサノオの神をまつている。海の神様である。現在、この地域には漁民はほとんどいなく、イチゴ農家が多い。氏子から海を恨むという声は聞いていない。昔は漁民もいた。漁民は「ハマタロウ」と呼ばれ、貧乏と考えられていた。一方で、オカは豊かと見なされていた。

八重垣神社のお天王さま祭りには幅広い参加者があった。角田（山元町から7キロほど西）や、福島県梁川町（西南に30キロ程）からも来ていた。これは自分の母の時代である。

震災前の場合、新年のお札を配りにいくと、喪があった家では新年のお札を受け取るのは断る人がいた。今回の震災では300軒のうち90名が亡くなった。興味深いのは、震災後神宮さんからもらった簡易の神棚を配ったときにはだれも断らなかったことだ。もともと自宅に神棚があり、手をあわせていた人ほどそれが無くなると不安が募るようである。手をあわせる対象があることで安心感を得るのだろう。おもしろいのは新年のお札については、喪の感覚が敏感に働くが、そのような人でも初詣に行くことは別と考えるらしい。なんでそんな対応になるのかはわからない。むかし漁民がいたころには、死者がでると21日間のみ喪に服した。喪が明けると忌明けの儀式をやった。

震災では家の年寄りがなくなって若い人だけが残った場合もある。こういう場合、まわりの年寄りから「あなたのとこ喪中だから〇〇だめ」と言われることがある。このときに間違いもあるので、自分がただしく教えて行かなくちゃと思っている。

#### 講中

八重垣神社では講中も受け入れていた。夏には2組、冬は40人ぐらいだった。代参である。1月14日のドラゴン祭のときに、夜中12時からきて、宿として区長さんが小平のセンターを開けてくれた。

#### 祭りの実行準備について

今年の3月ぐらいに氏子総代があつまった。総会もあった。そのときに「笑って集まれるのは、神社のまつりだからね」「祭りはやりたい」となった。特に仮設住宅に暮らす住民からはそうだった。正月くらいからだろうか、いや被災直後から祭りはやりたいという声があった。総代さんたちの「のり」がこの祭りをうごかす原動力になった。今回の祭りも、3月から実施を検討してきた。「さってばさ」=言ったら即、この意識が祭りの復興を早めた。

もともと震災直後から、お札やお守りなどの要望が多かったので、すぐに準備した。被災者の「すがりたい」という思いは感じていた。

### 神社に集まっている石碑について

神社の敷地内にはさまざまな石碑（馬頭観念など）が並べられている。これについて質問したところ、元々は個人宅にあったものらしい。むかしは地区内すべてを1時間かけてまわっており、個人の敷地内でも勝手にはいつて拜んだりした。それが代替わりしたり、順に時間をかけてまわるのが大変になったり、道路の拡張工事になったりすると神社にもってくるようになり、こんなに集まった。